

A. マーシャルにおける心理学研究と経済学との連関

松山直樹

I はじめに

アルフレッド・マーシャル (1842-1924) といえば、経済学者として部分均衡理論に代表される現代経済学への理論的貢献が強調されるが、彼は経済学に専念する以前にグロートクラブにおいて心理学研究に従事していた。このことは、彼の「1867年から1875年の間における経済学の徒弟身分の時代」(Pigou 1925, 358) について触れられる際には必ずといっていいほど指摘されてきた (Keynes [1933] 1972; 馬場 1961; Whitaker 1975, vol. 1; 西岡 1990; Groenewegen 1995 など)。さらに、晩年に「再び生涯を送らなければならないのなら、私は生涯を心理学に捧げるだろう。経済学は理想との関わりがあまりにも乏しい」(Keynes [1933] 1972, 200/訳 266) と回想しているように、マーシャルは一貫して貧困の解決に対して心理学が大きな役割を果たすと考えていた。つまり、マーシャルの経済学研究の目的は、現代経済学に理論的貢献をした定常的な経済の分析だけではなく、常に変化する経済の分析——いわゆる有機的成長理論とマーシャルが呼んでいる経済成長理論——を展開することにあつたのである。彼の経済成長理論は、多かれ少なかれ彼の心理学研究¹⁾の影響を受けていると考えられる。なぜなら、第一に、彼の経済成長理論は、教育によって継続的に発達する人間の活動を理論的基礎としており、第二に、彼の心理学研究の目的は、

人間の能力が発達する可能性を探求することにあつたからである (171/訳 230)。しかし、マーシャルの心理学研究の内実が明らかにされたのは 1990 年代前半のことであり、10 年以上経た今日においても、マーシャルの心理学研究と彼の経済学との包括的な関係は明らかにされていない。

従来の研究は、マーシャルの心理学研究と経済学の局所的な関係を指摘するものが中心であつた。例えば、ラファエリは、マーシャルの第三心理学研究論文 'Ye Machine' で想定される機械的人間モデルと経済学で扱われる経済主体が「性格 (character)」という点で関係していることを指摘するとともに (Raffaelli 1994, 79-80)、マーシャル経済学において労働者階級に必要とされた将来を実感する能力が、機械的人間の推論のメカニズムから拡張されていることを明らかにした (Raffaelli 2003, 25)。マーズは、マーシャル経済学における経済主体を「機械的人間」として述べることはまったく問題ないという (Maas 1999, 616-17)。ラファエリはまた、マーシャルが人間本性を合理的側面と道徳的側面に区別できると考えていたことを指摘する (Raffaelli 2003, 97)²⁾。西岡は、マーシャルの経済分析における「他の条件を同一にして」という静学分析の仮定が 'Ye Machine' に見出すことができるという (西岡 1993, 76)。さらに、西岡 (2003) や Raffaelli (2003) は、マーシャルの『経済学原理』(以下、『原理』と表記) の

第四編で扱われる組織の分化や統合に関する議論を神経生理学的な観点から捉えることにより、'Ye Machine'における分析がマーシャルの産業組織に関する議論に反映されていると指摘する。

筆者は、こうした従来の研究で指摘されてきた個々の論点について異論はないが、マーシャル体系において、彼の心理学研究と経済学との関係を包括的に説明する必要があると考える。この点を明らかにするため、本稿では次の二つの概念に注目する。一つは、マーシャルの心理学研究において扱われる「人間の性格 (human character)」である。つまり、人間の性格は、各個人の意識メカニズムを表現するという点である³⁾。もう一つは、経済学において扱われる「人間本性 (human nature)」についてである。この概念は質的な変化を生み出す時間を考慮するものである。人間本性は、超長期 (secular) という時間のもとで、世代交代を通じてのみ変化するところの人間一般に共通する性質を意味する。短期的には、各個人において人間の本性は変化しない⁴⁾。

マーシャルは、心理学研究においても経済学と同様の分析の手順を踏んでいる。例えば、彼は経済学の分析手順について「需要と供給の平衡ないし均衡は、経済学のより進んだ段階では、…生物学的な色調を帯びるようになる」(Marshall 1898, 43)と述べる。このように、彼の部分均衡分析が経済現象を分析するにあたって静態のみを想定していたわけではないことは明らかである。またマーシャルは、'Ye Machine'において「われわれは、ほどなく単純な事例から派生した、より複雑な事例を扱うつもりである」(Marshall 1868, 118)と述べており、また彼の初期の経済学講義においても「[複雑な]問題を小さな部分に分けることは絶対に必要なことなのである」(Raffaelli et al. 1995, 87)という。つまり、マーシャルの分析手順は、第一に静態的分析を行い、その後の段階において動的

な分析が展開されるというものである。したがって、本稿では 'Ye Machine' で想定されている機械的人間モデルの説明に対して静態と動態という分析上の区別を導入する。さらに、マーシャルが「生命に関するすべての科学は相互によく似ており、物理的な科学には似ていない」(Marshall 1898, 43)というように、彼の心理学研究と経済学が人間を扱うという点に注目すれば、それらは似通った学問的性質をもつと考えられる。ここで本稿の結論を先取するならば、人間の能力が発達する可能性を探求した心理学研究が、経済進歩を引き起こす要因と考えられている人間本性の向上に結実していることから、マーシャルの心理学研究と経済学には方法論的にも研究目的にも一貫性があるといえるのである。

それゆえ、本稿では、主として1868年にグロートクラブで報告された第三心理学研究論文 'Ye Machine' を取り上げ、心理学研究と経済学の関係について包括的な分析を展開する。本稿の構成は次のとおりである。第II節では、当時のイギリスの経済学者に対する心理学の影響について概観を行い、次いでマーシャルの研究動機を整理する。第III節では、マーシャルの一貫した分析方法に沿って、'Ye Machine' で想定される「人間の性格」——機械的人間モデルの意識メカニズム——について考察する。つづいて第IV節では、前節と同様にマーシャルの分析方法に沿って、マーシャル経済学における「人間本性」を心理学研究における「人間の性格」との関係から明らかにする。特に、ここでは「人間本性」の動的側面を彼の経済学における生活基準および経済騎士道概念との関係から捉える。最後に、第V節において全体のまとめを行い、マーシャルの心理学研究と経済学との関係を明らかにする。

II マーシャルに対する連合主義心理学の影響

19世紀後半のイギリスにおいて、心理学と経済学の双方を研究した経済学者はマーシャルだけではない。シャバスの指摘するように、諸個人の感情や動機、あるいは意識のメカニズムを扱う心理学を経済学において論じることは、「ヴィクトリア時代の経済学者に必要とされたライセンス」(Schabas 2005, 140)であった。このような動向の発端の一つは、ミル父子と親交があり、当時のイギリスで活躍していた心理学者 A. ベイン (1818-1903) にある。彼は、『感覚と知性』(初版, 1855年) や『情緒と意志』(初版, 1859年) において生理学と連合主義心理学⁵⁾を緊密に結合させた人物である (139)。ベインの影響は、ミル父子だけではなくジェヴォンズにも及ぶ。ジェヴォンズは、感情の量の比較に関するベインの考察を踏まえた上で、「その[感情や動機を扱う]理論は、一個人の精神の状態を研究することを想定し、そして経済学全体にこの研究を基礎づけている」(Jevons [1911] 2001, 14-15 / 訳 12) と述べる。このようにして、彼は「最終効用度 (final degree of utility)」という表現によって快楽や苦痛の逓減の現象を説明した (33 / 訳 40)。マーシャルがジェヴォンズの「最終効用」の概念を強く意識していたことはよく知られた事実であり⁶⁾、マーシャルの心理学研究もまたベインから大きな影響を受けている (Marshall 1867a; 1867b; 1868)。

ところが、マーシャルの後継者であるピグー (1877-1959) などの経済学に見られるように、経済学において心理学を扱う傾向は、20世紀初頭のイギリスの主流派経済学者たちに受け継がれなかった⁷⁾。事実、「経済学者たちの中で相対的に短命であった心理学への熱狂は、1859年の J. S. ミルの宣言に始まり、多かれ少なかれ 1924年に亡くなったマーシャルに終わっている」(Schabas 2005, 134)。したがって、マーシャ

ルの『原理』に見受けられるように、彼が心理学的な概念や現象を経済学の理論的根拠の一つとして展開しているという事実は、1860年代後半に彼が心理学を研究していたということだけでなく、当時のイギリス経済学の学問的流行が影響していたと考えられる。

後に詳述するように、マーシャルの心理学研究の主眼は人間の道徳的行為に関する意識メカニズムにある。彼は機械的人間の意識メカニズムを分析した結果、歴史的時間の進行とともに、どのような種族が生き残るのかという問題に焦点をあてる。マーシャルはそのような問いに対して、道徳的な自己犠牲を進んで行う人々によって構成される種族が生き残るという。この視点は、『原理』で明確に示される人間の自己犠牲に関する分析へ継承されている。

したがって、連合主義心理学の流れにあるマーシャルの心理学研究は、『原理』で扱われる人間の自己犠牲と種族経験に関する動的な分析の準備を提供する。言い換えれば、マーシャルは経済学において、「人間本性の柔軟性 (pliability of human nature)」それ自体に関する分析を行っていない。それは、かつて熱心に取り組んでいた人間の意識メカニズムを分析対象とする心理学研究に期待していたからと考えられる。次節では、もっとも体系的にまとまっているマーシャルの第三心理学研究論文 'Ye Machine' について考察する。

III マーシャルの心理学研究における「人間の性格」

1. 「人間の性格」の静態的な側面

マーシャルの第三心理学研究論文 'Ye Machine' は、ベインの著作やコンディヤック (1714-1780) の『感覚論』(1754) などから影響を受けており、連合主義心理学の流れに沿うものである⁸⁾。人間の意志を扱う当時の心理学は、人間の「内的現象相互間の結合と、外的現象相互間の結合との間の結合 (connexion) を

取り扱うもの」であった(矢田部 1942, 178).
そこで本節では、マーシャルの分析方法に従い、
‘Ye Machine’における内的現象と外的現象の関
係を《脳—身体》の単純なモデルから捉え、外
的環境の変化を認めない静的なものとして考
察する。

第一に、マーシャルは、単純なモデルとして、
大脳と小脳の区別のない脳と身体という内的構
造をもつ機械的人間を考察する⁹⁾。マーシャル
は、脳の基本的なメカニズムを次のように考え
た。脳は、外的環境からの刺激に対してよりス
ムーズな行動を実行することを可能にするため
に、記憶の機能を備えている。記憶は近接や類
似による観念連合から生じるのであり、自然法
則的に経験から期待を創出する。そして、記憶
が期待を生み出す働きと連合の強度を促進する
働きをもつことから、連合によってできた観念
の結びつきは、他の観念の結びつきと関係をも
つようになる。彼はこの連鎖的な関係の構築を
「熟考」と呼ぶ(Marshall 1868, 118)。

マーシャルは、このような機能の脳をもつ機
械的人間が外的環境から刺激を受ける状態を想
定する。その刺激は身体から感覚を通じて脳へ
伝わる。身体で受容した感覚は脳に観念を生じ
させる。脳の内部では、繰り返し行われる行動
を動機づける快楽やその逆の苦痛によって、感
覚の観念と行動の観念の間に自然法則的な観念
の連合を形成させる。このような快楽と苦痛の
関係が熟慮となり、連続的な行動を生じさせる。
通常の人間と同様に、機械的人間も快楽を求め
る一方で、苦痛を避けようとする。このように
して、より緊密な観念の連合を形成し、積極的
な行動を引き起こす(118)。別言すれば、脳に
おける行動の観念連合が身体における行動を引
き起こすのである。したがって、この一連の過
程は、一重のループ現象として、図の点線内部
に示される単純モデルとして表すことができる。

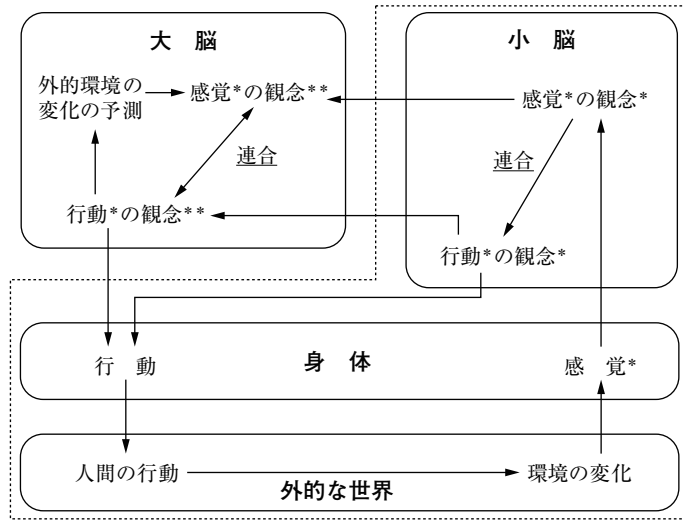
このように、‘Ye Machine’では外的環境の変

化を考慮しないという想定の下で、機械的人間
の内的システムにおける単純な刺激と反応の現
象が考察された。この機械的人間の単純モデル
は、不可逆的な時間の概念を考慮していないこ
とから、定常的なモデルとして捉えることがで
きる。しかし、それは現実の人間の意識メカニ
ズムを説明しえない。マーシャルの心理学研究
の目的は、人間の能力が発達する可能性を探求
することにある。ゆえに、彼は「われわれは、
ほどなく単純な事例から派生した、より複雑な
事例を扱うつもりである」(118)と述べる。本
節で考察した定常的な単純モデルの機械的人間
は、「人間の性格」の非定常的な複雑モデルを
叙述するための準備と考えることができる。つ
まり、意識メカニズムの動的な現象を解明す
るために、定常的な機械的人間の意識メカニ
ズムが扱われたのである。

マーシャルは次の段階において、外的環境の
変化を考慮し、人間が経験に即して自らにとっ
て有利な手段を導く意識メカニズムや、行為を
する以前の先読みに関する精神現象の解明を試
みる。さらに、それらの分析を根拠にして、人
間の道徳的行為に関する意識メカニズムを追究
する。したがって、次項では《脳—身体》モデ
ルにおける単純な一重ループの現象ではなく、
マーシャルが分析の主眼とする現実の人間の性
格形成メカニズムに近似させた《大脳—小脳—
身体》モデルの複雑な多重のループ現象を考察
する。

2. 「人間の性格」の動的な側面

機械的人間は外的環境から受ける刺激に反応
し、行為の意思決定を行う。その一方で、現実
の人間は外的環境の変化による種々の影響を考
慮しながら意思決定を行っている。次の段階で
は、機械的人間の内的現象と外的現象の関係を
《大脳—小脳—身体》の複雑なモデルから捉え
る必要がある。そこで、現実の世界と同じよう
に外的環境の変化を考慮することから機械的



機械的人間のメカニズム

出所：筆者作成。Raffaelli (2003) は、マーシャルの明快とはいえない議論を、単純なプロセスから複雑なプロセスに至る過程を三段階に分けて説明している。本稿では、単純モデルを点線の枠内で示し、複雑モデルと同一図式内で説明することによって、マーシャルの議論をいっそう簡略化している。注9において説明しているように、刺激-反応における一重ループの伝達プロセス（単純モデル）を示す場合はアスタリスクが一つ、多重ループの伝達プロセス（複雑モデル）を示す場合はアスタリスクが二つ付されている。

人間の動的な側面を考察する。

複雑なモデルでは、これまで脳として描写してきたものを小脳とし (120)、さらに大脳を考慮することから機械的人間の内的構造について考える。小脳は単純モデルの脳の機能と同じ手順で働き、感覚の観念と行動の観念の間に自然法則的な観念連合を形成する。大脳もまた同様に、感覚の観念と行動の観念の間に自然法則的な観念連合を形成する (120)。例えば、感覚が行動と補完的な関係にあるような観念に起因している場合、大脳は、小脳から伝達される感覚の観念によって新たな感覚の観念を生じさせる。この新しい感覚の観念は、自然法則的な連合によって行動の観念に関連づけられる。この関連づけられた行動の観念は二重の力を持っている。一つは行動に対応する観念を動かす力であり、もう一つは感覚の観念の間に変化を生み出す力である。つまり、大脳において形成された神経回路は、感覚の観念 (大脳) と行動の観念 (大脳) の双方向的なつながりを生じさせ、

新たな内的構造を形成するのである (Raffaelli 1994, 78)。

また、マーシャルによれば、外的環境の変化による失敗や不完全な結果をもたらす可能性は次のような過程を経ることから解消される。まず、外的環境の漸次的な変化が、大脳における感覚の観念と行動の観念による連合に刺激を与える。この刺激によって、不安定要因が引き起こされる。しかし、経験の蓄積によって刺激は大脳において予想に変化し、その予想は以後の意思決定に必要な行動の観念を生じさせる。このようにして、不安定要因は刺激と反応における多重のループ現象によって解消される。マーシャルはこの一連の作用を推論の連鎖と呼ぶ (Marshall 1868, 121)。さらに、機械的人間は、熟慮によって能動的な行為である有意行動を生じさせる。このようにして、「推論の連鎖を行う大脳」、「連合の原理によって大脳に新たな観念を生じさせる観念を有する小脳」、「身体」そして「外的環境の環境変化」を包含した一連の

流れとする多重のループの現象は、図に示されるように、単純モデルでは考慮されなかった大脳を媒介する複雑モデルとして表される。このように、《大脳—小脳—身体》の構造をもつ機械的人間は、推論の連鎖などを通じて自らの行動をより確実な意味をもつものにする。

さらにマーシャルは、「人間の機械への一層の擬人化を推し進めて」（西岡 1993, 80）、機械的人間の意識メカニズムにおける言語や代数、幾何学、音楽などの「知性に関する教育」の作用について述べ¹⁰⁾、「道徳的行為者 (moral being)」としての機械的人間に関する議論を展開する (Marshall 1868, 123-29)。マーシャルは「その〔道徳的行為の〕根本的な原理は、共感のそれ〔原理〕であろう」（129）と言い、次のように共感のメカニズムを説明する（129-30）。第一に、機械的人間は他の機械的人間の行為を観察・知覚し、他の機械的人間が石炭を欲しているという状態に関する観念を生じさせる。第二に、他の機械的人間の石炭を欲するという状態を知覚した機械的人間は、自らの精神的な苦痛を伴う場合であっても、より望ましいと想像される結果を予測し、脳内で観念の連合を緊密にする。最終的に、石炭を供給することによって生じる他の機械的人間の感情に関する観念は、観察者である機械的人間自身に快楽を生じさせ、より強い観念連合の形成を可能にする。このようにマーシャルは、機械的人間の自己犠牲を伴う利他的な側面を取り上げることから、共感のメカニズムを説明する。

共感とは、ヒュームやスミスの道徳感情に関する理論において重要な位置を占める概念である。例えば、ヒュームは「われわれはただ他人の感情の原因あるいは結果を感知するだけである。われわれはこれらから感情を推論する。したがって、これらがわれわれの共感を生起させるのである」（Hume [1740] 1964, vol. 2, 335-36 / 訳 [四] 186）といい、人々の道徳感情が、他人の感情の知覚に由来する共感から生じるこ

とを指摘する。一方で、スミスは「われわれは、他の人々が感じることに、直接の経験を持たないのだから、彼らがどのような感受性を受けるかについては、われわれ自身が同様な境遇において何を感じるはずであるかを心に描くよりほかに観念を形成することができない」（Smith [1776] 1976, 9 / 訳 [上] 24。強調は引用者）と述べ、想像上の立場の交換を重視する。さらに彼は『国富論』において、共感を行動の根本原理にして個人がフェアプレイの精神のもとに自由に市場において競争することによって、経済や社会の厚生が向上することを議論する。

西岡（1993, 73）はマーシャルの機械的人間の分析の発端をヒュームに求め、Raffaelli（1994, 84）はマーシャルの共感の概念がスコットランド道徳哲学者やミルから影響を受けていることを指摘する。さらに、マーシャルは第一心理学論文において、「私は、共感 (sympathies) の物理的側面と精神的側面が、他の精神現象の物理的側面と精神的側面の各々を生み出すという関係の概念を形成するにあたり、そのようなスペンサーの試みが、かなりの程度われわれを助けていると考えている」（Marshall 1867 a, 99）と述べている。このように、マーシャルは共感の原理を展開するにあたってスペンサーの議論も参考にして¹¹⁾いる。マーシャルは、「私はついでながら、これら〔道徳的行為者〕の種を保っている自然選択の力に注意を向けなければならない。自然選択の力のなかで、共感の原理はもっとも強力である」（Marshall 1868, 130）と述べており、人々の存続が、道徳的行為の根本原理である共感の原理に強く影響されるというのである。ラファエリは、このようなマーシャルの考察を進化論的連合主義心理学¹²⁾と捉えており、「楽観的で、進化主義的な決断」（Raffaelli 1994, 84）と述べる。‘Ye Machine’では、「共感と進化概念との関係」の議論が十分に展開されないが、『原理』ではその議論をより詳細に展

開している。

マーシャルは、「人間の性格」に関する動態的なメカニズムやそれを応用した「共感」の分析に関する研究を進めていくうちに、人間の能力の発達として労働者階級的生活状態をいかに改善させるかという経済学的問題に直面する。そしてマーシャルは、1871年から翌年にかけて心理学と経済学のどちらを生涯の学問にするのかについて真剣に悩むようになる(Whitaker 1996, vol. 2, 285)。次節では、マーシャルが経済学によって心理学研究の限界を克服しようとした形跡を明らかにするために、彼の心理学研究がどのように経済学に反映され、拡張されているのかについて考察を進めていく。

IV マーシャル経済学における「人間の性格」と「人間本性」

1. 「人間本性」の静態的な側面

マーシャルは当時の経済学の一般的動向として、「人間本性の柔軟性」や、実際の経済活動に影響を与える個々の「人間の性格」に注意が向けられていることを『原理』において指摘している(Marshall 1920, 764/訳[一] 282-83)。さらに、彼は「人間の意志が、注意深い思索に導かれて環境を変容することによって、人間の性格を大きく変容できること、それによって、性格にとって、…より望ましい新しい生活状態を実現できることを信ずるようになった」(48/訳[一] 65)と述べる。このように、マーシャルは『原理』における経済分析のなかに「人間本性」や「人間の性格」の概念を包摂する。

そこで、マーシャルの経済学の静学(一時的、短期、長期)の分析や動学(超長期)の分析に従って、「人間本性」の概念に関しても静態的および動態的に分析を進めていく。本節では、「人間本性が現在の状態にとどまっているとすれば」(235/訳[二] 149)という仮定を反映し、人間本性の定常的な状態について分析する。

マーシャルは、経済学研究には二つの側面が

あるという。一つは日常生活を営む人間の研究であり、いま一つは富の科学としての研究である。ウィックステードは、『政治経済学辞典』の「経済学と心理学」という項目において、「政治経済学が富の科学であるのなら、それ[政治経済学]は、欲求(wants)を満たすために、そして欲望(desire)を満足させるために人々によってなされる努力を取り扱うのである」といい、「『欲求』、『努力』、『欲望』、『満足』の各々そしてすべてが心理的現象(psychic phenomena)である」と述べる(Wicksteed 1899, 140)。この文章はマーシャルの『原理』を意識したものであろう¹³⁾。例えば、マーシャルが『原理』の初版において、「次のような普遍的な法則がある。いくつかの欲求がそれぞれ制限されるという法則と、人々のもっている物の総量のあらゆる増加と相まって、いっそう多くの物を獲得することに対する欲望の熱意が減退するという法則である」(Marshall 1890, 155)と述べているように、各個人の欲求や欲望には、財の獲得量との関係において捉えられる普遍的な法則が存在する。なぜなら「欲求には無限の種類があるのだが、一つ一つの欲求には限界がある」(155)からである。

この「欲求」に関する分析は、『原理』の第二版(1891)以降において「欲求の飽和あるいは限界効用の法則」として扱われる。さらにこの法則は「人間本性に関するよく知られたこの基本的な傾向」を表したものである(Marshall 1920, 93/訳[一]134, 傍点は引用者)¹⁴⁾。ただし、人間本性に関するこの法則には、「明らかにしておくべき隠された前提が存在する。それは、人間自身の性格と嗜好に何らかの変化が生ずるだけの時間を認めない」(94/訳[一] 135, 傍点は引用者)というものである。このように、質的な変化に要する時間を認めないというマーシャル経済学の静態的な分析方法は、心理学研究における静態的な定常モデルの分析方法と同様のものである。ゆえに、このような人間本性

を、「人間本性の柔軟性」に対する概念として「人間本性の定常性」あるいは「定常的な人間本性」として把握することができよう。

したがって、時間概念に注目することから、マーシャル経済学の「欲求」の飽和や「効用」の分析において想定される定常的な人間本性は、心理学研究における外的環境の変化を認めない「単純モデルの機械的人間」と対応関係にある。だが、マーシャルの心理学研究と経済学の関係は静態的な分析のみに見られるものではない。次項では、人間本性の静態的な側面の分析を基礎にして、超長期の時間において扱われる人間本性の動態的な側面を、「生活基準」と「経済騎士道」というマーシャル特有の概念から詳細に考察していくことにする。

2. 「人間本性」の動態的な側面 (1)

——生活基準——

マーシャルは、心理学研究において外的環境の変化を認識するだけでなく、変化に対応した行動を意思決定する機械的人間を考察していた。このような外的環境の変化と活動主体の意思決定に関する考察は、彼の経済学においても展開されている。「将来の便益に対する『現在価値』の評価」(Marshall 1920, 120/訳[一]177)に関する考察がまさにそれである。

マーシャルは、「将来を明瞭に実感する能力」(562/訳[四]85)を労働者階級の人々が貧困から抜け出すために不可欠な能力と考えていた。彼は、このような人間の性格の形成過程を歴史的に捉えることから、社会的および経済的厚生の上昇するメカニズムを明らかにする。例えば、彼は「子供たちや文明の初期状態における国民は、遠い将来の便益を実現することがほとんど不可能である。未来は現在によってさえぎられている」(Marshall and Marshall 1881, 37/訳47)という。一方で、同時代に生きる19世紀後半の人々に対して、「人間は依然として遅延に対しては幾分忍耐不足だが、徐々に将来に

おける現在の安楽やその他の享楽の獲得のためにそれらを進んで犠牲にするようになりつつある」(Marshall 1920, 680/訳[四]255)と述べる。マーシャルは、このように観察されうる事実を踏まえて、「人間はより非利己的となり、それゆえ家族のための将来の準備をするために働きかつ貯蓄する性向を強めつつある」(680/訳[四]255)と指摘する。

しかし、「高賃金を稼いでいる者であっても、ある程度の教育を受けてでもない限り、めったに〔現在のためにと同様に、将来のために賃金を〕貯めておこうとは考えない」(Marshall and Marshall 1881, 38/訳47)のである。マーシャルは、人間の性格形成に関する歴史的な考察から、将来の便益を考慮できるような人間本性を労働者階級に獲得させるために、教育や訓練の重要性¹⁵⁾を導く。そこからマーシャルは、教育や訓練が労働の効率化だけでなく、人間本性を向上させるための余暇の時間をもたらしつつあることを指摘する。マーシャルは、「経済進歩は家族愛に依存している」(39/訳47-48)と考えており、余暇の時間を家庭内教育に結びつける。なぜなら、「貨幣を借りた人は利子をつけて返さねばならないのと同じように、人間は自分の子供たちに、自分が受けたよりもより良い、より完全な教育を与える義務を負う」(Marshall 1873, 117/訳216)からである。このように、教育の効果は世代を超えて見られるものであり、世代が経るとともに人間本性を向上させる。

実際には、多くの親が上記のような気持ちを抱く一方で、「それ以上のことをするためには、非利己的であるという道徳的な性質とあたたかい愛情に加えて、まだ一般的になっているわけではない、ある種の心の習慣が必要とされる」(Marshall 1920, 216-17/訳[二]122)とマーシャルはいう。すなわち、将来を先読みし、それを実感する習慣の獲得が必要とされたのである(217/訳[二]122)。マーシャルは、このような将来を実感する習慣に基づいて、子供や家族

の将来のために現在を犠牲にする態度が重要であるという(232-33/訳[二]145)。ゆえに、人々は現在において注意深く支出を行い、体力を強化することのない食事や道徳的に不健康な生活様式を避けなければならない。しかし、この段階まで人間本性が向上すると、人々は自らの欲求を活動によって調整するようになる。マーシャルは、このような活動によって自らの欲求を調整することを「生活基準 (standard of life)」と定義する(689/訳[四]268)。さらに、彼は、「全般的な文明の進歩と若者に対する責任感の増大が、国民の増大しつつある富の多くを、物的な資本から人的資本に対する投資へと転向させた」(682/訳[四]257)という。このように、「国民的投資としての教育」(216/訳[二]121)によって、潜在的な才能の埋没を防ぐことができ、人間本性の漸進的な向上がもたらされると考えるのである¹⁶⁾。

このように、人間本性を向上させるためには、教育によって、ある種の心の習慣である「将来を実感する能力」の獲得が求められる。人間は記憶によって過去の経験を参照することから、推論や熟考を行い、意思決定をする。その意思決定による行動を繰り返すことによって、自らの性格をより良いものへと高める。さらに、人々は人間本性の持つ利己的な欲望を共感によって抑制し、家族愛という自己犠牲を伴う利他的な行為をするようになる。ゆえに、マーシャルは「共感人間本性全体に確実に作用する唯一の堅実で強力な力である」(Marshall 1923, 326/訳[二]188)と考えるのである。

したがって、共感に基礎づけられている家族愛と「将来を実感する能力」の向上とが相俟って、人々は貯蓄を行うようになる。蓄積された資本は教育などに投資され、教育は人間本性を陶冶する。それゆえ、所得の上昇に伴って欲望の上昇が生じる。一方で、「先を見通す」能力によって活動がその欲望の上昇を抑制する。マーシャルの心理学研究は、このような「先読

み」や「道徳的な自己犠牲」などの人間本性の向上に関わる重要な機能を、推論の連鎖に基づく意識メカニズムとして分析していた。つまり、心理学研究における機械的人間の複雑な意識メカニズムおよび道徳的行為に関する意識メカニズムは、生活基準を向上させる人々の欲望の調整メカニズムを基礎づけるものであるといえる¹⁷⁾。

3. 「人間本性」の動的な側面 (2)

——経済騎士道——

マーシャルの心理学研究を踏まえることによって、より明確になる彼の経済学概念は「生活基準」のみではない。マーシャルによれば、経済や社会の進歩を達成するためには、生産技術を利用する労働者側の問題を改善するだけでなく、生産技術を所有する経営者や実業家の側の人間的な進歩もまた重要であるという。そのために、実業家たちは企業の利益だけでなく、労働者の立場や公共の利益、社会の秩序などについて常に留意しなければならない。そこでマーシャルは経済騎士道の精神の必要性を説く。実業家には、知覚力 (perception)、想像力 (imagination)、推理力 (reasoning) の三つの能力が必要であり、そのなかでも想像力は「もっとも偉大な能力」である(822/訳[二]325)。しかし、マーシャルはこれら三つの能力以上に重要なものがあるという。それが共感である(823/訳[二]326)。

マーシャルによれば、実業家の性格や人間本性は大学生活を通じて形成されるという。なぜなら、「学生間の共感、常に弱い側に、ないしは弱いと思われる側に向けられる」ため、「そのような[共感の心を発達させるような]訓練を持たない雇用者よりも、容易に被用者の心を読むことができる」からである(823/訳[二]326)。一般に、人は成年に至るまで自らと同じ階級の人々の間で生活することが多い。共感の心を発達させる訓練を受けてこなかった実業家

は、労働者の立場にたつて労働問題を考えることができない。その問題を常に雇用者の観点から見ているからである。雇用者あるいは実業家などの「重要な人間の集団と重大な公共の利益を取り扱わなければならない人々」(822/訳[二] 326)による「共感」に基づく行為は、道徳的な自己犠牲を伴うのであり、マーシャルの描く経済や社会の進歩と密接に関連する。

前述したように、マーシャルは「共感と進化概念の関係」を経済学において詳細に論じている。彼は『原理』において家族の利害という狭い範囲を超えて種族の利害へと移る場合について、次のように指摘する。

理性と言語をもっている人間においては、種族に対する責任感が種族の強化に及ぼす影響はより多様な形をとる。…次第に、[蜂や蟻のような]下等動物のなかにもその萌芽が存在していた理性に基づかない共感が徐々に領域を広げ、行動の基礎として慎重に採用されるようになる。…ゆえに生存競争は、結局のところ、個人が周囲の人々のために自己犠牲をもっとも進んで行っている人間たちの種族に作用する。(Marshall 1920, 243/訳[二] 161)

マーシャルは、「家族愛は一般に利他主義のきわめて純粋な形態である」(24/訳[一] 33)と考える。家族愛から種族愛への広がり、共感による道徳的な自己犠牲を伴った利他主義が広がることを意味する。上記の引用文に見られるように、マーシャルの経済分析には生物学の発想が取り入れられており、それは人間と経済や社会の相関的進歩を説くために非常に重要な役割を果たしている。すなわち、人間が共感に基づき、徐々に道徳的な自己犠牲を行うことによって、社会的な組織もまた漸次的に発展するのである。

実業家の性格や人間本性は共感を根本として

形成される。実業家や雇用者は、公共的な利益を扱い、さらに経済や社会の進歩を支える社会的な組織を運営している。マーシャルは、そのような実業家や雇用者に対して「経済騎士道精神」を求める。例えば、「[実業における騎士道精神に関する]啓蒙が広がるにつれて、富裕者の方では公共の福祉に対する献身が、富裕者の資力を貧困者の援助に有効に活用する徴税者の努力を助けることに、大いに貢献するかもしれない」(719/訳[四] 312)。

このように、種族の存続あるいは産業区域における経済および社会的厚生の上向という観点に着目すると、マーシャルの経済騎士道精神における利他的行為の概念は、心理学研究における共感の概念にその根拠があることがわかる。なぜなら、本稿第III節の図「機械的人間のメカニズム」から示されるように、大脳を媒介する多重ループの精神現象は、環境の変化を考慮し、人間の予測や推論といった先を読む能力や想像のメカニズムを説明する。また、利己心の抑制あるいは道徳的な自己犠牲を表現する道徳的行為は共感の原理に基づいていた。したがって、マーシャル経済学に特有な「生活基準」や「経済騎士道精神」などの「人間本性の柔軟性」を前提とする概念は、マーシャルの初期心理学研究で扱われた多重ループの精神現象や道徳的行為者の意識メカニズムを考慮することによって、より明確に理解することができるのである。

V む す び

本稿では、マーシャルの第三心理学研究論文‘Ye Machine’で扱われた「人間の性格 (human character)」と彼の経済学における「人間本性 (human nature)」という二つの概念の検討を通じて、彼の初期心理学研究と経済学に包括的な連関があることを明らかにした。本稿の議論は、以下のようにまとめることができる。

第一に、‘Ye Machine’およびマーシャル経済

学では、同じ分析の手順が採られていた。それは、①「他の条件を同一にして (*Cæteris Paribus*)」を仮定する静態的分析、②静態では捉えることのできない動きをみる動態的分析、という順に分析するものであった。

第二に、①において、心理学研究における機械の人間の単純モデルと経済学における「定常的な人間本性」が対応関係にあることを示した。心理学研究では、刺激が直接的に反応を導く機械の人間の意識メカニズムを考察した。本稿では、それを単純モデルとして描写した。単純モデルは、刺激と反応の一回性のループ現象によって説明されるものであった。他方、経済学では、経済分析において最も基礎的な法則のひとつである「限界効用逓減の法則」に注目した。マーシャルは、この法則を展開するにあたって、質的变化の生じない静態的な活動主体を念頭に置いていた。つまり、「定常的な人間本性」が想定されていたのである。

第三に、②において、機械の人間の複雑な意識メカニズムを踏まえることによって、初めてマーシャル経済学における人間本性が十全に理解できることを示した。まず、心理学研究では、経験に基づいて熟考や予測を行う機械の人間の意識メカニズムを分析した。刺激と反応が多重ループ現象を生じさせることから、本稿では、それを複雑モデルとして描写した。この複雑モデルを基礎にして、自己犠牲として表された道徳的行為を検討した。マーシャルは、その自己犠牲の意識メカニズムを「共感の原理」と呼んでいた。さらに、自然選択のなかで生き残る種族が、共感の原理にもとづいて行為の意思決定をしていることを指摘した。次に、経済学では、「生活基準」と「経済騎士道」の概念を取り上げた。生活基準は、活動による欲望の調整メカニズムのことであり、教育を通じて向上する人間本性を前提にしていた。予測あるいは先読みの能力の獲得が教育の主な目的であった。経済騎士道の精神は、道徳的な自己犠牲を含む公共

的精神であった。それゆえ、経済騎士道の精神の担い手とされる実業家は企業の利益だけでなく、社会の秩序や公益も考慮しなければならなかった。そのため、実業家は、学生時代の共同生活を通じて共感の能力を獲得する必要があった。このように、「生活基準」と「経済騎士道」のどちらの概念も、柔軟な人間本性を前提にしていることは明白であろう。

したがって、静態的分析と動態的分析のいずれの場合にも、初期心理学研究は、マーシャル経済学において想定される人間本性を分析するための基礎となっていたのである。

ところが、Raffaelli (2003, 52-53) などの先行研究は、『原理』第四編で展開される経済組織の分化や統合に関する議論を神経生理学的に捉えることで、そのような議論にマーシャルの初期心理学研究の影響があるという。確かに、礪川 (1988) や岩下 (2008) の指摘するように、『原理』の分化と統合に関する議論は、スペンサーの社会有機体説を参考にしており、マーシャルの経済成長理論を理解するうえで重要である。だが、マーシャルの心理学研究における課題は、人間の能力が発達する可能性を探求することであった。ゆえに、彼の心理学研究は、経済組織の分化と統合に関する議論のアナロジーであるという局所的解釈に限定されない。これまで議論してきたように、マーシャルの心理学研究は、マーシャル経済学全般にわたって前提される経済主体に存立根拠を与えるものである。より詳細には、'Ye Machine' の「人間の性格」に関する分析は、マーシャル経済学における「人間本性の柔軟性」の理解を促進するものである。まさしく、この点にマーシャルの人間研究の連続性ないし一貫性を見出すことができる。

『原理』の最終版である第8版まで削除されることのなかった「経済学が一面においては富の研究であると同時に、他面において、またより重要な側面として人間研究の一部である」

(Marshall 1920, 1 / 訳 [一] 2) という一文に示されるように、マーシャルは、富の研究に適用される数学的手法や図形的表現の重要性以上に、心理学研究にもとづく人間研究こそが不可欠であると考えていた。そのような認識はまた、晩年の心理学研究に再び取り組みたいというマーシャルの気持ちにも表れている (Keynes [1933] 1972, 200 / 訳 266)。このように理解することによって、初めて、人間本性の変化を理論的基礎に置いているマーシャルの経済成長理論——いわゆる、有機的成長理論や経済生物学——が明らかにされるであろう。

松山直樹：北海道大学大学院

注

- 1) マーシャルは、1867年から1868年にかけて四編の心理学論文を発表した。第一論文と第二論文についてはLoasby (2006)、門脇 (2007)、第三論文については西岡 (1993)、Raffaelli (1994, 2003)、Cook (2005)、第四論文についてはRaffaelli (1994) に詳しい。
- 2) マーシャルは、B. キッド宛ての手紙 (1894年6月6日) において、彼の『社会進化論』(初版1894年)の謹呈に対して感謝の意を述べ、そこからたくさんのことを学んだと記している。しかし、マーシャルは、理性と自己犠牲の関係に関するキッドの考え方に反対し、「私は、区別されうるが分離しえないものとして、人間本性の理性的側面、本能的側面、道徳的側面を理解している」(Whitaker 1996, vol. 2, 114) という。ラファエリは、マーシャルの「人間本性の理性的側面と本能的側面」を「人間本性の合理的側面」とし、「道徳的側面」はそのまま解釈している。
- 3) マーシャルは「機械的人間の性格 (character of the Machine)」を、自らにとって有利な手段を即時に導くことや行為するにあたって先読みをすることと指摘している (Marshall 1868, 122)。彼はまた経済学において「人間の性格」を、環境から影響を受け、個人的な意志によって変化する人間の性向とする (Marshall 1920, 48 / [一] 65)。ラファエリは、マーシャルの心理学研究で扱われる「性格」を「ルーティンと本能から成る機械的作用に関する内的システムを表現している統一概念」(Raffaelli 2006, 490)と定義する。本稿では「人間の性格」を、心理学研究における機械的人間と経済学における経済主体の双方に共通するものとして、「意志によって変化する個々の人間の内的システムを表現する概念」と定義する。
- 4) マーシャルは、超長期の時間区分における行為主体あるいは経済主体を「人間本性」の分析対象とする。彼は『原理』において、人間本性は徐々にしか変化できないということや、新たな機会や行動の仕方は数世代の間で人間本性を変化させること、さらに社会組織の変化は人間本性の変化を待たねばならないことを指摘している (Marshall 1920, 752 / 訳 [一] 258 など)。本稿では「人間本性」の概念を「社会組織の変化との関係で捉えられ、世代の進行とともに変化する人間本性」と定義する。
- 5) 心理学において association という単語は、連想と訳す場合がある。今田 (1962, 107) によれば、本来は、観念 (想) と他の観念 (想) が結びつくという意味において連想と用いられていたが、その意味が拡大され、ある簡単な感覚が複雑な事態を思い起こさせることや、感情と観念との結びつきや、さらに進んで行動の単位の結合までを含むようになったため、連想という代わりに、より広い意味で連合というようになったという。
- 6) マーシャルとジェヴォンズの経済理論は、限界効用に代表される数学的手法の採用という点で類似しているが、効用理論に対する両者の態度は異なる。供給価格、需要価格、生産量について、ジェヴォンズがある条件の下で一つのものが他のものを因果的に決定すると考える一方で、マーシャルは、それらが互いに影響関係にあるため順番に決定されることはないとする (Marshall 1920, 817-19 / 訳 [三] 305-09)。マーシャルによれば、価値は効用によってのみ決定されるわけではないのである。彼はまた、J. N. ケ

- インズ宛ての手紙においても「ジェヴォンズの大きな誤りは、効用命題を適用することが価格の唯一の真実であるとしたことであった」(Whitaker 1996, vol. 1, 306) と述べている。
- 7) 経済学において数学や道徳科学を展開した経済学者にエッジワースがいる。マーシャルは、エッジワースの『数理心理学』(1881)の書評をアカデミー誌(1881年6月18日)に寄せており、その本がエッジワースの天才の証だと賞賛する(Whitaker 1975, vol. 2, 265)。しかし、「数学が、…複雑な種類の算数であるとする人にとって、その議論は役に立たない。…実質的な問題は、道徳科学のなかに数学的推論を適用することができるかどうかではなく、有益かどうかである」(265. 傍点は引用者)と言い、エッジワースによる数学的表現や抽象的議論の複雑さを批判する。このように、数学的推論の適用を完全な分析ツールとして用いるべきか否かという判断にマーシャルとエッジワースの相違が見られる。
- 8) ベインの『感覚と知性』および『情緒と意志』に共通するテーマは有意行動(volition)であるが(羽生 1991; 1992), 「ベイン説の根本思想は既にコンディヤックにおいて説かれている」(矢田部 1942, 260)。「Ye Machine」は、石像(statue)にひとつずつ感覚を付加していき、どのように認識と機能が感覚から生じるのかを論じたコンディヤックの『感覚論』も参考にしていると思われる。
- 9) マーシャルは「Ye Machine」において、キーワードとなる用語上部の中心にアクセント記号のような線を付したが、ラファエリは「Ye Machine」を公刊する際に、マーシャルの用いた「線」をアスタリスクに代えて表記した(Raffaelli 1994, 130 n1)。本稿の本文ではそれらの表記を省略した。
- 10) 西岡(1997, 2003)やRaffaelli(2003)は、「Ye Machine」におけるバベッジのオートマトンに関する記述に注目して、「Ye Machine」におけるマーシャルの主眼が、道徳的行為を行う際の人間の意識メカニズムを解明することではなく、機械的人間の主体的な能力形成にあると解釈している。
- 11) スペンサーの共感に関する議論は磯川(1988)に詳しい。磯川(1988, 27)は、同情[本稿でいう共感]によって自己利益と他人の利益を追求する人間を、スペンサーの適者生存の法則における適者であるという。さらに、スペンサーの適者が、マーシャルにおける自己犠牲を実行する道徳的能力を備えた人間にあたりと指摘する。マーシャルの共感の概念は別稿にて詳細に論じる。
- 12) 心理学に対する進化論の影響は、「ハーバート・スペンサーが『心理学原理』を出版した1855年に端を発している」(Warren [1921] 2002, 16/訳4)。心理学史家のワレンは、心理学を生理学的基礎の上で構築しようとしたスペンサーの研究を重視しつつも、進化学説を連合主義心理学の領域に拡張したのは、スペンサー以上にジョージ・ヘンリー・ルイスの研究であるという。
- 13) マーシャルは次のように述べる。「経済学は一面においては富の科学であり、また他面においては社会における人間の行為を対象とする社会科学の一部である。すなわち人間の欲求を満たすための努力のうちで、富または富の一般的な代表物である貨幣を尺度としてはかることができる欲求と努力を取り扱う部分である」(Marshall 1920, 49/訳[一] 68)。
- 14) 人々の効用や需要を考察した『原理』初版(1890)の第3篇第2章は、第2版(1891)で第3篇第2章と第3篇第3章に分けられている。このことは、マーシャルが効用や需要の法則をより詳細に論じる必要性を感じていたことを示している。
- 15) マーシャルは、スケートを例にして人間の脳と行動の関連を脳生理学の観点から説明する。例えば、スケートを何度か練習した後は、思考を中断することなく様々な障害(氷の表面の凹凸など)を避けることができるようになる。なぜなら、「脳はすべての動きに直接に支配を及ぼす。…脳に位置する思考力の直接の指揮下にある神経力の行使によって、関連する神経と神経中枢の間に、おそらくは明瞭な物理的

- な変化を含む一組の結びつきが、徐々に築き上げられる」(Marshall 1920, 251n/訳 [二] 172, 脚注 1) からである。また、新たに習得した技術を仕上げる場合も練習によって可能になるといふ。「練習が完全を生み出す (practice makes perfect)」(250/訳 [二] 171) のである。それゆえ、「[労働者への] 教育は、人間がどのような命令を受けても、それをすぐに理解させる。もしも機械が故障したり、彼の仕事の計画がどこかまちがった方向に向かったりした場合、彼はただちにものごとを修正し、それによって大きな損失を防ぐことができる」(Marshall and Marshall 1881, 10-11/訳 13) のである。
- 16) マーシャルは、労働者が家庭教育などによって道徳的資質を向上させ、紳士階級への階級間移動を達成する可能性があると指摘する。労働者階級の進歩に関する研究は近藤 (1995) に詳しい。
- 17) マーシャルは、当時の科学的水準では、経済学が人間本性の変化を研究することは不可能であったと述べている (Marshall 1923, 676/訳 [一] 235)。

参考文献

- Bain, A. 1865. *The Emotions and the Will*. Longmans, 2nd ed. London: Green, and Co.
- . 1868. *The Senses and the Intellect*. Longmans, 3rd ed. London: Green, and Co.
- . [1882] 1969. *John Stuart Mill: A Criticism with Personal Recollections*. New York: Augustus M. Kelley. 山下重一・矢島杜夫訳『J・S・ミル評伝』御茶の水書房, 1993.
- Condillac, E. 1798 [1970]. *Traité des Sensations*. In *Œuvre complètes de Condillac*, Tome 3. Genève: Slatkine Reprints. 加藤周一・三宅徳嘉訳『感覚論』創元社, 1948.
- Cook, S. 2004. Missing Links in Marshall's Early Thoughts on Education. *European Journal of the History of Economic Thought* 11 (4): 555-78.
- . 2005. Minds, Machines and Economic Agents: Cambridge Receptions of Boole and Babbage. *Studies in History and Philosophy of Science* 36 (2): 331-50.
- . 2006 a. Charles Babbage. In *Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar: 124-29.
- . 2006 b. Economics and Psychology. In *Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar: 190-96.
- Groenewegen, P. 1995. *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842-1924*. Brookfield: Edward Elgar.
- . 2003. Alfred Marshall on Homo (Economicus): Evolution versus Utilitarianism? In *Evolutionary Economics and Human Nature*, edited by J. Laurent. Cheltenham: Edward Elgar: 114-33.
- Hume, D. [1740] 1964. *A Treatise of Human Nature*. In *David Hume: The Philosophical Works*, Vol. 1, 2. Aalen: Scientia Verlag Aalen. 大槻春彦訳『人性論』[一]-[四], 岩波書店, 1948.
- Jevons, W. S. [1911] 2001. *The Theory of Political Economy*, 4th ed. In *the Palgrave Archive edition of the Writings on Economics of W. S. Jevons*, Vol. 3. New York: Palgrave. 小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳, 寺尾琢磨改訳『近代経済学古典選集 4 経済学の理論』, 日本経済評論社, 1981.
- Keynes, J. M. [1933] 1972. *Essays in Biography*. In *Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. X. London and New York: Macmillan and Cambridge Univ. Press. 大野忠男訳『ケインズ全集第 10 巻 人物評伝』東洋経済新報社, 1980.
- Loasby, B. J. 2006. The Early Philosophical Papers. In *The Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar: 16-25.
- Maas, H. 1999. Mechanical Rationality: Jevons and the Making of Economic Man. *Studies in History and Philosophy of Science* 30 (4): 587-619.
- Marshall, A. 1867 a. The Law of Parsimony. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 95-103.
- . 1867 b. Ferrier's Proposition One. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 104-15.
- . 1868. Ye Machine. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4: 116-32.
- . 1872. Mr. Jevons' Theory of Political Economy. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A. C. Pig-

- ou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「ジェヴォンズ氏の『経済理論』」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 316-25, 1991.
- . 1873. The Future of Working Classes. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A. C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「労働者階級の将来」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 193-21, 1991.
- . 1890. *Principles of Economics*. 1st ed. London: Macmillan.
- . 1898. Distribution and Exchange. *Economic Journal* 8 (29): 37-59.
- . 1907. Social Possibilities of Economic Chivalry. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A. C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳「経済騎士道の社会的可能性」『マーシャル経済論文集』所収, 岩波ブックセンター信山社, 128-60, 1991.
- . 1920. *Principles of Economics*. 8th ed. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』[一]-[四], 岩波ブックセンター信山社, 1985.
- . 1923. *Industry and Trade*. 4th ed. London: Macmillan. 永澤越郎訳『産業と商業』岩波ブックセンター信山社, 1986.
- Marshall, A. and M. P. Marshall. 1881. *The Economics of Industry*, 2nd ed. London: Macmillan. 橋本昭一訳『産業経済学』関西大学出版部, 1985.
- Marshall, M. P. *What I Remember*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Mill, J. S. [1859] 1978. Bain's Psychology., In *Collected Works of John Stuart Mill, Vol. XI Essays on Philosophy and the Classics*, edited by J. M. Robson. Toronto: Univ. of Toronto Press: 341-73.
- Parsons, T. 1931. Wants and Activities in Marshall. In *Alfred Marshall: Critical Assessments*, Vol. 1, edited by J. C. Wood. London: Croom Helm: 179-208, 1982.
- Pigou, A. C. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*. London: Macmillan.
- Raffaelli, T. 1994. Marshall's Analysis of the Human Mind. In *Research in the History of Economic Thought and Methodology*. Archival Supplement 4, 57-93.
- . 2003. *Marshall's Evolutionary Economics*. New York: Routledge.
- . 2006. Character and Capabilities. In *Elgar Companion to Alfred Marshall*, edited by T. Raffaelli, G. Becattini, and M. Dardi. Cheltenham and Northampton: Edward Elgar: 488-94.
- . 2007. Marshall's Metaphors in Method. *Journal of the History of Economic Thought* 29 (2): 135-51.
- Raffaelli, T., E. Biagini, and R. McWilliams Tullberg. 1995. *Alfred Marshall's Lectures to Women: Some Economic Questions Directly Connected to the Welfare of the Laborer*. Aldershot and Brookfield: Edward Elgar.
- Schabas, M. 2005. *The Natural Origins of Economics*. Chicago and London: Univ. of Chicago Press.
- Smith, A. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. In *Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith II*. Vol. 1, 2. Oxford: Clarendon Press. 大河内一男監訳『国富論』[一]-[四], 中公文庫, 1978.
- . [1790] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. In *Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith I*. Oxford: Clarendon Press. 水田洋訳『道徳感情論』[上][下], 岩波文庫, 2003.
- Warren, H. C. [1921] 2002. *A History of the Association Psychology*. In *Foundations of the History of Psychology*, Vol. 6. Bristol: Thoemmes Press. 矢田部達郎訳『心理学史』創元社, 1951.
- Whitaker, J. K. 1975. *The Early Economic Writings of Alfred Marshall*. Vol. 1, 2. London: Macmillan.
- . 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*, Vol. 1, 2. New York: Cambridge Univ. Press.
- Wicksteed, P. H. 1899. Political Economy and Psychology. In *Dictionary of Political Economy*, Vol. 3, edited by R. H. I. Palgrave, London and New York: Macmillan: 140-42.
- 磯川 曠. 1988. 「マーシャルの進化論的倫理学の研究」『商経学叢』35 (2): 113-35.
- . 1996. 「マーシャルの進化論研究の発端」『経済学史学会年報』34: 14-27.
- 今田 恵. 1962. 『心理学史』岩波書店.
- 岩下伸朗. 2008. 『マーシャル経済学研究』ナカニシヤ出版.
- 門脇 覚. 2007. 「初期マーシャルの認識論と思想形成」『功利主義と社会改革の諸思想』所収, 音無通宏編著, 中央大学出版部: 487-517.
- 近藤真司. 1995. 「経済進歩における労働者の役割」

- 『龍谷大学経済学論集』34(4):91-117.
- . 1997. 『マーシャルの「生活基準」の経済学』大阪府立大学経済研究叢書, 第85冊.
- 白井孝昌. 1993. 「ケインズの描いた A. マーシャル像」『経済学の射程』所収, ミネルヴァ書房: 153-79.
- 西岡幹雄. 1990. 「マーシャル経済学の生成」『マーシャル経済学』所収, 橋本昭一編著, ミネルヴァ書房: 20-51.
- . 1993. 「心理学から経済学へ」『経済学論叢』44(4):68-91.
- . 1997. 『マーシャル研究』晃洋書房.
- . 2003. 「産業の特定地域への集中と経済集積」『経済学論叢』54(4):67-97.
- 橋本昭一. 1997. 「初期マーシャル研究の現在」『関西大学経済学論集』46(5):553-94.
- 馬場啓之助. 1961. 『マーシャル』勁草書房.
- 羽生義正. 1991. 「連合理論再考(1) — A. BAIN の有意動作発生論について」『広島大学教育学部紀要 第一部』39:127-35.
- . 1992. 「連合理論再考(2) — A. BAIN の認識作用発生論について」『広島大学教育学部紀要 第一部(心理学)』41:117-22.
- 矢田部達郎. 1942. 『意志心理学史』培風館.